

故老の人々が語っている。しかし現在はわずかにその名残りを留めるにすぎない。

このような先人の遺業をできるだけ尊重し活用して、過去から積み上げた安全基盤を確保することが必要である。県都、松山を守る**写真 2**のような準スーパー堤防のような破堤しない堤防になっている。このことは、先人の知恵・工夫により、水害の発生や被害を軽減するため重信川・石手川を付替えた社会資本整備により、地域の安全基盤を確保し、今日の松山発展の基礎がつけられたことを教えている。そういう意味で、この石手川の準スーパー堤防は防災風土資源といえる。

《得られる知恵・教訓》

先人の知恵・工夫により、水害の発生や被害を軽減するため重信川・石手川を付け替えたことにより、地域の安全基盤を確保し、今日の松山発展の基礎がつけられたことを教えている。



写真1 岩堰の堀り抜き開削の場所



写真2 現在の石手川堤防（愛媛県松山市）

次に香川県の代表的な水害・治水に関する防災風土資源の事例を2つ選び、以下に述べる。

## エ) 香川県の代表的な水害・治水に関する防災風土資源の事例

### ① 大禹謨（だいうぼ）（高松市）（表3の番号58）

香川県高松市が誇る名園、栗林公園の商工奨励館の中庭に『大禹謨』と達筆で書かれた縦58cm横20cmの石碑（写真1）がある。



写真1 栗林公園の商工奨励館の中庭に『大禹謨』

これは、現在の高松発展の基礎を築いた治水・利水の偉人、西嶋八兵衛（にしじまはちべ）の筆なることが確認されている。彼は、いまから約380年前、寛永年間に香東川の改修（図1）を行った。私たちが暮らして今日の高松市は、かつて江戸時代の寛永の頃までは、香川郡大野の西（香川県

立香川中央高校付近)で川筋が二股に分かれた香東川氾濫原であった。一つの流れは、現在の御坊川の川筋で、もう一つは現在の香東川で、これを、寛永8~9(1631~2)年、現在の香東川に固定し、御坊川(現在の高松街)へ香東川の洪水(図2)が流れないようにした。

彼はこの普請を行うにあたって自ら『大禹謨』と書して石に刻ませ、流れを堰いだ分岐点(現在の香川中央高校西)に建てた。現在、そのレプリカが、その近く(中央高校のグラウンド横、写真2)に建てられている。また、付け替えた現地付近と思われる雑木林には写真3のように古い堤防と思われる玉石積が現在も残っている。さらに大禹謨由来記が写真4のように掛けられている。

禹は中国古代の大聖で、黄河の氾濫を治めて衆望を得、ときの天子瞬のあとをうけて帝位につき、夏の国の始祖となった人で、「治水の神」として崇められている。この禹の遠大な理想、謨(はかりごと)を記述したものである。



図1 香東川のつけかえ地点



図2 Goo g le 地図上に当時の香東川を推定し上書きした図



写真2 中央高校グラウンド横の大禹謨レプリカ (2012年撮影)



写真3 現地の古い堤防と思われる玉石積 (2012年撮影)

今日の高松市の繁栄を築いた西嶋八兵衛は、このほかにも約90のため池の築造など治水利水普請を行い讃岐の水を治めた。現在、香東川の治水を成し高松の安全安心を築いた西嶋八兵衛を思うとき、この人の仕事には品格を感じる。彼が築いたのは、堰堤や堤防という単なる構造物ではなく、地域の人たちへの思いが込められているように思う。380年後もこの社会資本整備は活かされており、防災風土資源といえるものである。

《得られる知恵・教訓》

行政は効率や数字だけを重視するのではなく、地域に暮らす人を思い、地域の将来を見据えて、正しい道に適合しているかどうかを基準として社会資本整備を考えるべきであることを教えている。

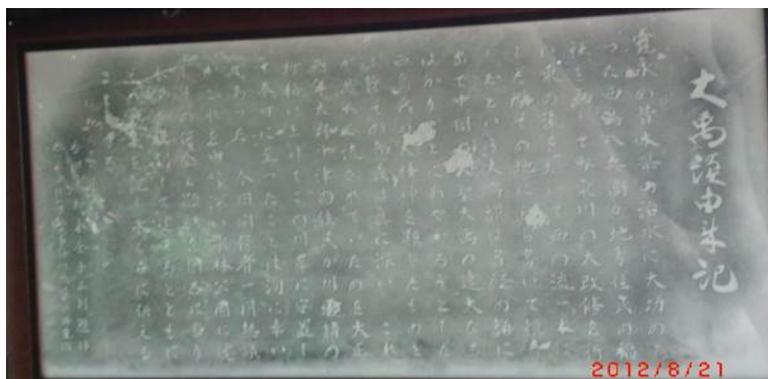


写真4 大禹謨由来記

② 新川の名の由来に残る治水対策(高松市)(表3の番号73)

新川は「なぜ新川なの?」という話をよく聞かれるが、昔、江戸時代の治水対策にその由来がある。古い地図や今も田んぼの中に残る川らしき跡、現在の航空写真(写真1)などからも想像がつく。高松今昔物語(香川工事事務所平成13年7月発行)の中に、春日川に合流していたと推定される新川の場所を示した図1がある。

図には新田開発前の海岸線の推定線とともに昔の新川の流れていた場所が描かれている。その図によると、新川は昔、久米池の南、久米山の西の東山崎町あたりから元山町で春日川に合流していたと考えられる。今のような流れになった時期は明らかではないが江戸初期の春日川下流の新田開発の頃だったと考えられる。



写真1 新川が春日川に流れていた跡が見える  
(2007年撮影写真に上書き)

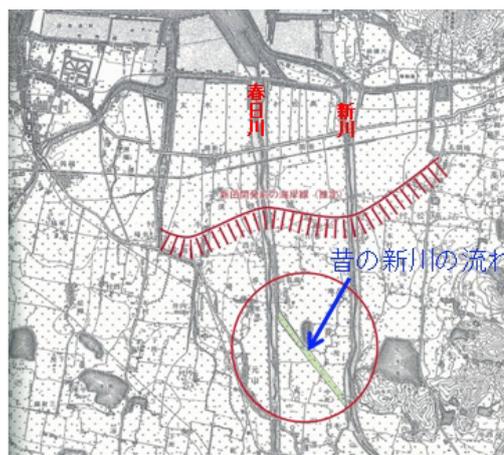


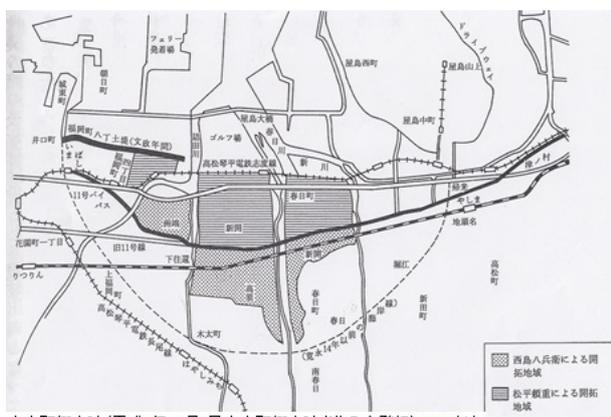
図1 昔の新川が流れていた推定場所  
(出典: 高松今昔物語に一部上書き)

新田開発については、1746(延享3)年に増田不意が著した「讃州府誌」の巻之一、寛永年間についての記載の中に、「十四年春、西嶋氏堤防を香川郡福岡、山田郡木太、春日の新田海濱に築き、潮汐を障げ、稲田と為す。之を新開と謂ふ。」と1637(寛永14)年に西嶋八兵

衛が堤防を築いて新田開発をしたことが記されている。木太町郷土誌（1995）の松島干拓地周辺略図（図2）によると、新川は、この江戸時代初めの新田開発や洪水から春日川下流域を守るため、同じ時期に造られたと考えられる。

このように上流から流れてきた洪水を下流地域を守るために新しい川に分離して海まで流す手法は、放水路方式として明治以降の治水対策として多く用いられている。2007年10月に撮影した航空写真（写真1）には、川らしき跡の2条筋跡が水路や道路として水田などに残っている様子がわかる。Googleの写真地図ではさらにはっきりわかる。

また現地には写真2のように旧の春日川堤防が現在も一部残っている。さらに春日川の堤防上からは、旧堤防と水路の間の旧河道跡と思われる田畑が直線上に残っていることが確認できる。現地は、おいしいざるうどんで有名な『うどん屋まっはま』の50m北側にあるので、是非、一度現地に行って2条筋の川跡を確認して見てください。



木太町郷土誌(平成7年12月1日木太町郷土誌を作る会発行)p220より

図2 春日川下流域の江戸初期の新田開発図



写真2 現地に残る春日川旧堤防

### 《得られる知恵・教訓》

新川は、川の由来のとおり今日の春日川下流域の発展の基礎を築いた春日川の放水路であることを教えている。

以上述べた32の代表的な水害・治水に関する防災風土資源は、沖積平野が水害発生のパテンシャルが高い地域であることを教えてくれている。これら潜在防災風土資源は各種工学的資料やデータとの比較によりわかった開放防災風土資源であり、今日の水害に強い家づくりや緑の堤防、多自然型川づくり、水害に備えた河川防災ステーション、洪水ハザードマップなどの危機管理対策の原型でもあり、今後の水害・治水対策に活用されるべき教訓が多くあった。

## 2.2 四国の地震・津波に関する防災風土資源

### 1) 調査対象

四国に残る地震・津波に関する防災風土資源として、徳島県の松茂町の春日神社の敬湔碑（けいゆひ）から香川県の長尾断層まで、図1の黄色ポイントで示す94箇所を調査した。

### 2) 調査結果概要

調査結果は、表4の名称に示すとおりである。